

# 魯迅と藤野巖九郎をめぐる

## ——日中関係の一齣——

徳永重良

はじめに

1. 仙台から東京、そして故郷へ
2. 北京と文学活動の展開
3. 厦門、広東から上海へ
4. 福井における晩年の藤野巖九郎

暫定的な結論

補論 1. 魯迅の死因について

補論 2. 陳独秀のその後

はじめに

筆者は、先に「藤野巖九郎と魯迅をめぐる——「惜別」：その前後——」（以下、前稿と呼ぶ）を本誌〔2015年3月号〕に発表した。そこで断っておいたように、仙台を去った後の魯迅の活動——とくに帰国後——については、十分に触れることができなかった。本稿は、前稿の続編である。ここでは、第1に、そのようなブランクをまず大まかにでも埋めること、そして第2に、前稿で論じきれなかった部分について補足すること、を目的とする。小論の狙いは、文学作品それ自体の内容に立ち入って論じることではない。というよりは、むしろそれらの形成の背後にある社会的・歴史的背景や人間関係の連鎖に着目し、それを通して日中両国のこの分野における相互関係の一端を明らかにしようとするものである。

### 1. 仙台から東京、そして故郷へ

さきに見たように、<sup>しゅうじゅじん</sup>周樹人（魯迅の本名）は、1906〔明治39〕年春、仙台医専を退学して、東京へ戻った。そしてその年の6月一旦、故郷の紹興に帰った。母親の決めた許嫁、<sup>しゅあん</sup>朱安と結婚するためである。<sup>しゅあん</sup>朱安は纏足をはき、文字も読めない女性であった<sup>1)</sup>。魯迅が彼女と結婚したのは、もっぱら母親を安心させるためだった。当時中国では、日本同様、結婚は、当事者ではなく、親が相手を決めるしきたりだった。母親は、息子が日本人女性を恋しているなどというあらぬ噂を

耳にして、矢のように彼の帰国を促したのである。彼は、挙式後わずか4日間しか郷里にとどまらず、新婦をそこに残したまま、二弟の周作人<sup>しゅうさくじん</sup>とともに再び日本に旅立った。彼はのちこの因習的な結婚を悔やんでいる。あとで触れるように、彼は教え子の許広平<sup>きょこうへい</sup>と自由意思にもとづき同棲することになる。

彼がいかに母親思いであったかについては、つぎのような注目すべき挿話<sup>エピソード</sup>がある。「自分（魯迅）は清末に革命運動をやっていたとき、ある要人の暗殺を上級のものから命じられた（光復会か？—引用者）、だが出かけるときに、自分はたぶん捕まるか、殺されるだろう、もし自分が亡くなったら、あとに母親が残っているが、母親をどうしてくれるかハッキリ聞いて置きたい、ということ申し出たら、そんなアトに心が残るようではダメだからお前はやめろということになった…」。魯迅は愛弟子の増田<sup>わたる</sup>渉にこのように語っている。〔増田 渉（1970）；34〕歴史に“if”は禁句だが、もし彼に孝心がなければ、後の魯迅文学は存在しなかったのである。われわれは彼の孝心に感謝しなければならない。

さて、東京で魯迅と弟・作人は友人許寿裳<sup>きょじゅしやう</sup>らとともに、文芸雑誌『新生』を発刊しようと活動を始めた。だがこの企画は、結局、失敗に終わった。原因は途中で仲間が脱落したり、集めた出版費用を持ち逃げしてしまったりしたからである。

魯迅は独逸語専修学校（独協大の前身）に籍をおき（彼は日本語を除くとドイツ語がもっとも得意な外国語だった）、ときには、日本に亡命してきた章炳麟<sup>しょうへいりん</sup>の歓迎会に出席し、彼の反清国の気迫と学識に感銘した。その後、章から古典についての講義をうけた。後年、章炳麟に対する周兄弟の評価は実に対照的である。すなわち、魯迅が、章の功績は「学術史上よりも革命史上における方が大きかった」と書いているのに対して、作人は「中国に対する章先生の貢献は文字・音韻学における功績がもっとも大きい」と評価した〔魯迅（1956）；劉岸偉（2011）；80〕。周兄弟の思想の違いが、この評価の差異によく表れている。

彼は弟とともに世界の文学作品を系統的に翻訳するという遠大な計画をたて、実行した。『域外小説集』（1909）がそれである。1、2巻まで東京と北京で出版した。文体は文語文。1巻を1,000冊、2巻を500冊刷り、さらに続刊を出す予定だったが、東京では全部で、たったの41冊（すなわち1巻は21冊、2巻は20冊）しか売れなかった。資金の目途が立たず、以降の続刊は取りやめざるを得なかった。〔魯迅選集（1956）；185-86〕。こうして2度までも彼らは挫折した。

当時の彼らは、「文芸〔と〕は性情を移し変え、社会を改造することができるものだ」という考えに立っていた〔同上〕。だが、当時の日本文学には、そのような明白に社会改造をめざす作品は皆無だった。それゆえ彼らの関心は主に海外文学とその翻訳に向かわざるを得なかった<sup>2)</sup>。ただ漱石は例外であった。漱石の風刺の面白さ、西欧文学を踏まえたうえでの「国民の文学」の形成、さらに興味深いことに日本語の普及に果たした漱石の役割に魯迅は注目し、漱石を愛読したと言う。

魯迅は、在日中国人のあいだでは、あまり評判が芳しくなかったようだ。彼は一刻もので知られる「浙東の人間」である。同地方には、すぐれた学者、文人が少なくないが、他面、粘り強いが、剛直狷介、一度決心したことは容易に変えようとしなないところがある。魯迅はその典型だった〔内山完造（1979）；84〕。留学生仲間には、工、医、法学などの実学を専攻する者が多く、もっぱ

ら帰国後の立身出世を目的にしたり、たんに遊興を目的としたりする者もいた。だから魯迅のように医学をあきらめ文芸などを学ぶ者は、変わり者と見なされても仕方なかったのだろう。さらに魯迅は、留学中、日本式生活スタイルで過ごすことが多かった。家では着物を着、緑茶を好んで飲み、ベッドなしで、つまり床（畳）の上に寝ることをあまり苦にしなかったという。他の留学生にすれば、自国の慣習をないがしろにし、高踏的な態度を取っている奴は、どうもいけ好かない。つまり魯迅は留学生仲間から「浮いていた」のである。同郷の仲間で、帰国後に親しい友となった<sup>はんあいのおう</sup>范愛農は、当時のことを小説のなかで（魯迅と思われる人物に対して）こう述べる。

「知らないのかね。僕は君〔魯迅〕がきらいだった——僕だけじゃない、僕らがさ」、と。〔魯迅（1953）「范愛農」〕

断髪、つまり辮髪を切ったものに対する反感も、凄まじかった。魯迅の三弟・周建人が、兄が東京で弁髪を切り、送られてきたその写真を見てショックを受けたこと、さらにその姿のまま帰郷し、まるで外国人が来たかのように大騒になった、と述べている〔顧偉良<sup>こいりょう</sup>（2004）〕。魯迅自身も「髪の話」（1920）を書いているし、しばしば、辮髪について述べている。—（故郷の人たちは）「まるで珍しい動物を見るように、その頭を見にきた。道端から「このガサツな奴！」、「にせ毛唐！」といった言葉が飛び交って来た。…罵声はさらに大きくなり、「犯罪者！」とか、「オチョコチョイ！」、と嘲弄した。」しばらく外出もできず、「…ついに万策尽き、ステッキを携帯し、…殴りつけることにした。」—魯迅の活動は、ある意味で、こうした庶民の因習、無知蒙昧、現状にとっぷりと漬かってよしとする、怠慢と投げやりな態度（没法子<sup>メイファーズ</sup>）——に対する怒りであり、そこから彼らを脱却させようとする苦闘に他ならなかった。それは途方もない努力を要し、彼をときに「寂寞」な境地におい込むのだった。

こうして、魯迅は1909年8月、7年余りに及ぶ日本留学を終え、帰国した。その前にドイツへ留学する希望をもっていたが、家長としての彼には、故郷にいる母一家への仕送りに加え、日本人女性、羽太信子と結婚した弟・作人一家への経済援助も負わなければならず、そのような経済的な余裕はもはやなかった。ちなみに魯迅の三弟・建人<sup>けんじん</sup>（1889～1984）は、のち信子の妹芳子と結婚している。芳子は姉の出産を手伝うために中国にきたのであった。建人は学校教員（生物学）をへて、のち上海の有名な書店、商務印書館の編集者となる。

帰国後、魯迅は友人許寿裳<sup>きよじゅしょう</sup>の伝でまず郷里の紹興府中学堂の教員となり（1909）、化学と生物学などを教えた<sup>3)</sup>。郷里の学校をいくつか転職したのち、1912年、教務総長（文部大臣に相当）に就いた、同郷で教育改革者として著名な蔡元培<sup>さいげんぱい</sup>に招かれ、教務部（＝文部省。当初は南京に、まもなく北京へ移転）の職員（博物館などを所管する部門の科長）に、つまり役人となった。これに伴い魯迅一家も北京へ移転。この間、彼は暇を見ては、古籍の収集・書写や拾遺に時間を割き、それらは彼の終世の趣味となるとともに、それについての著書をも何冊も著わすほど精通した。

この間に辛亥革命（1911年）が行われ、清帝政は崩壊した。アジアではじめての共和国が成立。だが帝政は瓦解したものの、内外の諸問題はあまりにも深刻だった。ヨーロッパでは1918年に休戦が成立したが、アジアでは平和とは程遠い混沌がさらに続いた。その重大な原因のひとつは、日本の対外政策にある。日本は、西欧列強が欧州での戦争に没頭している際に乗じて、中国に対して

強硬な要求を突きつけた。いわゆる二十一カ条の要求（1915年）<sup>4)</sup>がそれで、ドイツに代わって山東半島の利権を獲得し、さらに中国政府をも日本の監督下におくこと（中国の「保護国」化）を狙うものだった。帝政復活をもくろむ袁世凱<sup>えんせいがい</sup>は、それに対して強く反対することができず、また列強もヴェルサイユ条約（1919）において、中国の期待に反し、山東半島の利権をあらまし日本に与えることを容認したのであった。（ただし政治・財政・軍事顧問に日本人を雇うことなどの露骨な「保護国化」条項は否定された。）

これに憤激した民衆は、この年の五月四日、北京大学の学生の呼びかけに呼応し、日本製品のボイコット、反政府運動、とくに外交責任者の厳罰と追放を要求する大衆運動を起こした。これが五・四運動<sup>ごしゅうどう</sup>と呼ばれる大規模な大衆抗議運動である。これには学生だけではなく、労働者も参加。五・四運動は、その後の労働者の組織的な運動に連続するという意味でも注目すべき運動であった。抗議行動は、北京だけでなく、全国各地に波及した。五・四運動のいわば「発火点」は北京大学であり、同大学はその拠点であった。そこで蔡元培<sup>さいげんぱい</sup>学長の強いリーダーシップのもとに行われてきた同大学の大胆な改革についてやや詳しく述べる。

## 2. 北京と文学活動の展開

北京大学は、京師同文館に端を発するが、文学、医術など7学科を有する総合大学としての形を整えたのは、1902年であった。（ちなみに東京大学が「帝国大学」として統合し、新しくスタートしたのは、1886年。）辛亥革命後、蔡元培は——革命後初代教育総長（文部大臣）に就いたが、すぐに辞任。欧州へ留学。——留学先のフランスから呼びもどされ、1916年、学制改革後の初代北京大学の学長に就任した。（1919年の職員録によると蔡は当時50歳。以下同様。〔劉岸偉（2011）〕彼は学長に就任すると、改革方針として「思想の自由」を打ち出し、組織や人事などに思いきった刷新を断行した。科挙に代わって新しい知識層形成のルートとなった海外留学からの帰国者、若手層を多数教授陣に招聘した。これまで保守的思想の砦や立身出世主義のコースであった大学に新風を吹き込んだ。こうして中国で最初の近代的な国立大学が誕生した。具体的に見ると、蔡の改革がいかに大胆なものであったかがわかるだろう。

文科の学科長には、陳独秀<sup>ちんどくしゅう</sup>（40）をすえ、周作人<sup>しゅうさくじん</sup>（魯迅の弟）（35）、錢玄同<sup>せんげんどう</sup>（32）、胡適<sup>こてき</sup>（28）らを教授に迎えた。魯迅も非常勤講師として文学史などの講義を担当した。陳、周、錢の3人は日本留学組であり、最年少の胡適は、コーネル大学とコロンビア大学で学び、とくにJ. デューイのもとでプラグマティズム哲学を修得。コロンビア大学で学位を取得したのち帰国した。陳独秀が推薦したという。さらに異色の人事は、図書館長兼史学担当（のちには経済学も）教授に李大釗<sup>りたishōう</sup>——彼も早稲田大に留学しており、マルクス主義をもっとも早く中国に紹介・導入した——を任用したことである。若き毛沢東は、同大学図書館職員として採用され、李大釗の下で助手を務めた。〔メイスナー（1971）; 19, 91〕

ここで陳独秀（1879～1942）と雑誌『新青年』について少し詳しく触れておく必要がある。陳も日本留学組で、弘文学院では魯迅の一学年上級生。彼は1915年、雑誌『新青年』（欧文名：

La Jeunesse; The Youth; 最初、『青年雑誌』。翌年、『新青年』と改名)を上海において独力で発行した。鮮やかな総合雑誌であり、その標語として「デモクラシーとサイエンス」をかかげた。陳は学科長に任命され、蔡学長の片腕として、彼の改革を補佐した。

陳独秀は、安徽省出身。彼は日本に留学し、その後も何回か日中間を行き来しているが、詳しい事情は不明。日本で陳は反清朝の革命家らと知り合い、西欧文化・思想を学ぶが、日本人とは密接な個人的関係をほとんど持たなかったようである。彼は、英、仏、独、日本語をマスターしたが、彼の関心はもっぱら中国、西欧であり、日本には向けられなかった。〔横山宏章 (1983); 以下も同じ〕

陳は『新青年』で主として中国人の精神的退廃、保守的、鎖国的、奴隷的精神状況を鋭く批判した。そしてその武器ないし準拠概念として近代西欧の思想、進歩性、科学性、人権思想を図式(シェーマ)化しながら、主張したのであった。批判は当然伝統思想である儒教、孔孟の思想にまで及んだ。このように概念を単純化する彼の主張は分かりやすく、辛亥革命後の混沌とした思想状況において、青年層の間で圧倒的な支持をえた。この時、陳独秀は、まさしく未来を指ししめず輝ける星のような存在であった。同誌は、発足当時、千部程度であったが、急速に読者層をふやし、当時としては異例の発行部数1万5~6千部をかぞえるに至った〔横山宏章 (1983); 115〕。中国では、回し読みをしたり、読書会で輪読したりするので、『新青年』の影響力は、発行部数をはるかに上回ったのは確実だ。

周作人は、「人の文学」を『新青年』1918年12月に発表した〔増田渉 (1972)に訳文が収録されており、以下の引用はそれによる〕。作人の言う「人の文学」とは、人間主義にもとづく文学であり、人道主義思想の文学であると言っていい。彼の人道主義は、むろん博愛主義ではなく、「一種の個人主義的人間本位主義である」と彼はいう。このような観点を基本として、「人生の諸問題に対して記録研究をする文章を、…人の文学というのである。」この視角から、中国には、非人間的文学が多いが、人間性の成長を促す種類の文学作品はごく少ないと指摘する。彼がモデルとして挙げているのは、イブセン、トルストイ、ハーディーなどの作品であり、それらを基準にして、自国の通俗的作品を批判する。彼自身広い教養と優れた知性をもった文筆家兼研究者であり、武者小路実篤はじめ白樺派の人々と密接な人的交流があった<sup>5)</sup>。〔関川夏央 (2003); 劉岸偉 (2011); 顧偉良 (2015)〕

胡適は白話(口語体)の表現形式への転換を提唱した。まさに「新文学運動」の開幕である。胡適の新文体の原則は、以下のとおりである。1) 内容のあることをいう。2) 古人の模倣をやめる。3) 文法にかなう文章を書く。4) 理由もなく深刻がらない。5) 陳腐な常套語はできるだけ避ける。



『新青年』表紙(A Pictorial Biography of Lu Xun)。魯迅「狂人日記」が掲載された号。1918年5月

藤井省三 (2002) から引用

6) 典故は用いない。7) 対語対句を考えない。8) 俗語俗字を避けない。〔増田渉 (1972); 289〕。要するに、「言文一致」の運動であり、表現様式の近代化にほかならない。

これは何も胡適の発明ではなく、「水滸伝」や「西遊記」などの大衆文学はつとに白話によって書かれてきた。ただ、中国では、文語文が長い間正統とみなされ、かつ形式偏重、繁文縟礼が支配的であった。他方、白話も洗練さを欠いており、新しい思想を表現するためには、十分ではなかった。文語体は、一部の上層階級の独占物であって、庶民には全く理解できないものだった。文学革命運動は、これを逆転させ、口語体・白話こそが正統な文体であると主張したのである。グレイは、これをルネッサンス期以降、ラテン語（聖職者や知識者層しか理解できない）に代えて、各国の庶民が使う民族語・口語を、その国の国語として使うこととした改革と同じ重大なものであった、と述べている。〔Gray (1990); 199〕 言いえて妙な比喩ではないか。

五・四運動が急速に拡大した背景には、口語体の一般化という一種の「情報革命」があったのである。この運動は、「文学運動」でもあり、両者は連動して進行し、いわば相乗効果をあげた。魯迅は、陳独秀らに勧められ、はじめての本格的創作を『新青年』(1918.5) (前ページの図参照) に寄稿した。「狂人日記」がそれである。このとき初めて魯迅というペンネームを用いた。これは口語体で書かれており、まさしく新しい文学運動に呼応する形をとっている。

この小品では、〈おれ〉という1人称が、自分の「被害妄想」を、他者である〈やつら〉に語り、訴えるという形式で、展開される。〈やつら〉には、地主、小作人だけでなく、自分の兄も含まれている。兄貴はまだ兄弟が幼かったとき、病死した妹の肉を食べたことがあり、いまに〈おれ〉も兄貴に食べられるのではないか、という恐怖を抱いている。兄はたしか「おれが四、五歳のころ、…こんなことを言ったっけ。父母が病気になったら、子たるものは自分の肉を一片切り取って、よく煮て父母にくわせなくては、りっぱな人間ではない、と。」〔「狂人日記」、魯迅全集、第二巻〕

この作品は、「四千年の食肉の歴史」という忌まわしい伝承を題材にし、中国社会のあらゆる部面で人々の行為を根づよく律している儒教思想のもつ非人間性を痛烈に批判するという意図をもつものと解釈できる。批判はいささか突飛である。ただ、末尾は「人を食ったことのない子ども」たちよ、という呼びかけで終わっている。将来への期待なのだろうか。全体の構成が、ややバランスを欠き、後年の彼のような緻密な展開はまだ見られない。未成熟の段階にあると言えよう。この作品を読んだとき、筆者はなぜかムクの画を連想した。不安の「叫び」を感じた。

ついで魯迅は「孔乙己」(1919) と「故郷」(1921) を『新青年』に発表した。前者は、魯迅が「自分が一番好きな作品」と言ったという作品〔片山智行 (1996); 133〕であり、短い、「狂人日記」に比べ完成度は高い。構成もコンパクト。科挙試験に何度も失敗したかつての秀才・孔乙己。いまや落ちぶれ、老輩にさしかかった彼は、ときどき酒場に飲みにきては、奇妙な文語体のセリフをつぶやき、まわりの人々の響きをかき、嘲笑の的になっている。それをお爛番の少年の目をとおしてリアルに描く。科挙のもつ暗い側面を軽妙なタッチで捉えている〔魯迅全集、第一巻〕。

「故郷」は、紹興の住み慣れた家を処分するため、久しぶりに訪れた故郷をめぐる「私」の心象風景を描いた抒情的な作品である。たとえば、子供のころ一緒に遊んだ友は、「私」を今では「旦那様」と呼び、二人の間には「悲しむべき厚い壁」ができてしまっている。…末尾の文章が美し

く、かつ含意に富んでいる。――

「私は思った、希望とは元来あるとも言えぬし、ないとも言えぬものだ。それはちょうど地上の道のようなものだ。じつは地上にはもともと道はない、歩く人が多ければ、道もできるのだ。」

〔魯迅全集 第二巻; 92〕

のちに許広平夫人は、当時（袁世凱による反革命の流れの中で）魯迅の寂寞とした気持ちを「『新青年』が（彼に創作の場をあたえることで一引用者）救ったのである」と回顧している〔許広平（1968）; 53〕（傍点は引用者）。こうして、魯迅は役人をしながら、これらの作品を発表することによっていまや作家としてのデビューを果たしたという。

辛亥革命後の新政府は、従来の「国文」を「国語」と科目名を改めるとともに、文語に対して口語文の比重をたかめ、口語の普及につとめた（学校制度改革令、1922年）。こうして、新しい教科書に五・四新文学が採り入れられることが多くなり、とくに「故郷」はもっともよく教材として採用されてきた。一方、日本では、戦後の1958年を端緒に以後、「故郷」を中学の国語教科書に採用する教科書出版社が増え、今ではほぼすべての教科書出版社が採用している〔藤井省三（2002）〕。この作品が日本でかくも広く採択・普及していることはまことに驚くべきことである。

その数年後、魯迅は中編小説『阿Q正伝』を発表しはじめた（1921～22）。この中編小説は、掲載された雑誌（『晨报』の文芸付録『晨报副刊』、日曜版のようなものか）の性格もあって、コミカルなタッチで描かれている。ある地方小都市における「革命」の実態を、阿Qという農民で使用人である主人公の幾ぶん奇妙な行動をとおして描いた悲喜劇。阿Qは、事実、オッチョコチョイで、皆に揶揄われ、虐げられているが、プライドだけはめっぽう高い。無実なのに、憤然と処刑にのぞむ。この作品は、辛亥革命のいい加減さ、支離滅裂さを揶揄し、抉り出している。自分達の欠陥をあまりにもリアルに指摘されているので、中国人自身はこの小説をあまり好きではないという〔内山完造（1979）〕。

### 3. 厦門、広東から上海へ

魯迅と周作人は北京女子師範大学でも非常勤講師として教えていた。1925年、政府の財政難から校費の遅配がおき、それを契機に北京のいくつかの国立大学で紛争が起きた。同女子師範大学ではリベラルな許寿裳学長がやめ、保守的な新学長になると教育方針は伝統的なものへ回帰した。五・四運動を記念する集会は禁止され、それに不満の態度を示し、校長を屈辱したという理由で、学生たちの代表6人が放校処分となった。学校当局は、教育部長と謀り、校舎をロックアウトし、同大学を廃校にするという挙に出た。魯迅ら教師の有志も当局に反対し、学生たちの反対闘争を支持した。結局、廃校方針は撤回され、学生側の勝利に終わった。

さきの処分に挙げられた学生の一人に、許広平がいた。彼女は魯迅に手紙を書き、講義や闘争その他の種々な問題について彼に教えを乞うた。魯迅はそれに対し丁寧に答えている。二人の間の手紙のやりとりは闘争後も続き、往復書簡は手を加えられたうえのちに『两地書』として出版された（1933年、魯迅全集13巻）。これは、魯迅も言うとおり二人のラブレターである。二人の間に

年齢や師弟関係を超え、次第に愛が芽生え、上海時代に二人は同棲することになる（1927年～36）。

当時、北京の治安はより悪化し、自分に逮捕令状がだされているのを知った魯迅は同年8月、そこから厦門へ脱出することを決心した。許広平も別途北京を離れ、郷里の広州へ向かう。

魯迅は、厦門大学の教授として迎えられた（林語堂の推薦による）。だが、彼は、著作の発行などの約束が守られていないこと、そして何よりも愛する許広平のすむ広州へ移りたいこと、などの理由で、短期間滞在しただけで、同大学を辞職。翌1927年の初めには広州の中山大学に移った。なお、作品「藤野先生」は厦門滞在中に最終的に仕上げられた。

広州は「革命の根拠地」であり、孫文の影響力がつよい地方である。地方軍閥の撲滅をめざす北伐戦争は、この地から開始された。しかし魯迅の期待と違って広東も反革命の勢力が勢いを増し、もはや革命の根拠地ではなかった。中山大学（魯迅は同大学の教授として迎えられた）の学生処分問題をめぐって、彼は処分に反対したが、処分は強行された。これを契機に彼は同大学を辞職。上海に転居する決心をした。

上海時代の彼の活躍については、記すべきことが多いが、ここでは紙幅の関係上いく人かの日本人との交流に叙述を絞らざるをえない。初めに日本人学生との出会い。当時、東京帝大文学部の学生だった増田渉は、魯迅の『中国小説史略』を読んで、類書にない優れた内容を知り、感動した（のちこの本は増田によって『支那小説史』として翻訳された。1935、サイレン社）。短期間でも上海に渡り、著者から直接教えを請いたいと思った。増田は、そのころ佐藤春夫のもとで下訳のアルバイトをしていた。佐藤に希望を述べ、彼に内山完造宛の紹介状を書いてもらい、中国へ渡航した（1931年）。

増田ははじめ内山書店で魯迅と出会い、親しくなると魯迅はこの無名の青年を自宅に招き、そこで午後2時ころから、途中休憩をはさんで、5時過ぎまで、みっちり1対1の講義を行った。ときにはそのあと夕飯をご馳走になることもあった。その間許夫人（魯迅のことを先生とよんでいた）は離れた別の机で、筆耕など自分の仕事をしていた。だが彼女の回顧録によれば、これで自分は『小説史略』の講義を2度聴いたことになる、と記している。さらに「そのとき、藤野先生の印象がかれ（魯迅—引用者）の脳中に生きていた」とも書いている。〔許広平（1968）；42〕筆者もまた増田の印象記のこの箇所を読みながら、藤野先生と魯迅のイメージとが重なるような気持を抱いた。

勉強ばかりではなく、ときには3人で映画も観たり、ダンスホールをのぞいたりもした。もっとも魯迅は「つまらぬ」といって、ダンスホールから早々に出てしまったが。こうして最初、数週間のつもりで訪中した増田は、10ヵ月も滞在することになった。増田は帰国後も魯迅とのコンタクトをたもち、学問上のことだけでなく、家族の安否をも知らせあう親しい関係がつついた。〔増田渉（1970）〕

もう一つ。魯迅の優しさというか、心の細やかさを示すエピソードを紹介しておこう。中野重治は、藤野巖九郎と同郷の福井県人で、隣村の高椋村（現坂井市丸岡）の出身。福井中学校（現 藤島高校）での藤野の後輩であった。

中野と魯迅のあいだには、戦前、彼らの文学理論から推して、相互に共感するものがあったと考えられる。中野は治安維持法違反で拘留され、2年の獄中生活後、転向して出所した（1934年）。共通の友人をつうじて、魯迅は、そのころケーテ・コルヴィッツの画集（ドイツの女流版画家。魯迅が初めて中国に紹介・出版した）が届くように手配した。画集を手にした中野は、転向という「負い目」のあとだけに、魯迅の厚意に深く感じるものがあった〔中野重治（1997）〕。

魯迅は、小林多喜二の官憲による虐殺に抗議し、彼の死を悼む追悼文を日本語でよせた。また国境を越えた連帯の意を表している。追悼文には肺腑を衝くものがある<sup>6)</sup>。

魯迅は、前稿で述べたように、1936年10月19日、急逝した。前日の18日、喘息が急に悪化し、内山完造に次のようなメモを書いた。「老版／＼ 又喘息ガハジマツタ。…電話デ須藤先生ニ頼ンデ下ダサイ。早速キテ下サル様ニト。…L 拜…」これが魯迅の絶筆となった。須藤医師ら3人の日本人医師たちが懸命に治療にあたったが、蘇ることはなかった。享年55歳であった。より詳しい治療と死因については、末尾の補論を参照して欲しい。

#### 4. 福井における晩年の藤野巖九郎

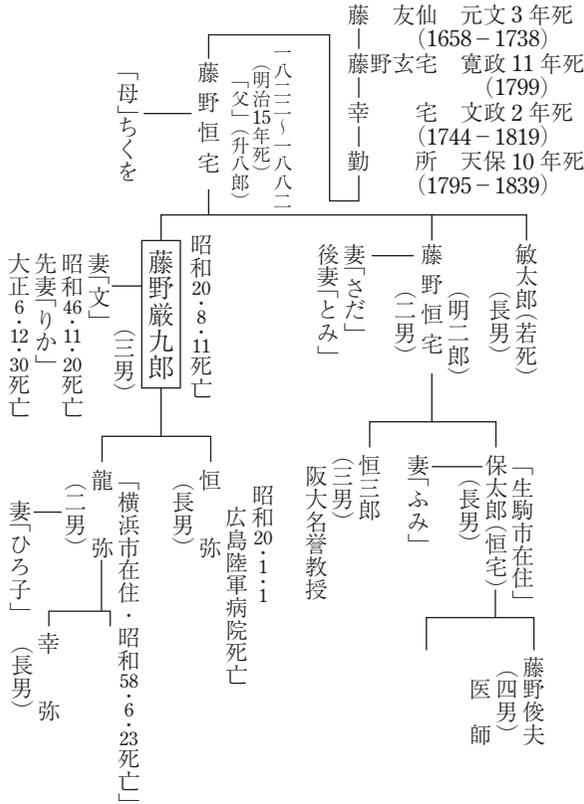
藤野巖九郎が厳しく公正な性格だったことは、あれほど目にかけていた周樹人（魯迅の本名）の答案に落第点をつけたことでも分かる。もっとも他の科目の点がよかったので周は結局落第しないで済んだが。その藤野がまだ名古屋の愛知医学校に勤務していたとき、たまたま知り合った女性を見染めた。女性の名は加藤りかという。りかは名古屋出身。両親を失い、弟と二人が残された。りかは母から習った三味線、琴がひけるので、偶然、藤野ら医学校の同僚たちの酒席に手伝いとして出たのだという。写真でみると、ほっそりした色白の美人だ。

藤野は薄幸な彼女に同情した。“*Pity's akin to love.*”「身分が違う、それに自分は胸の病を抱えている」と言って、りかは、結婚を断るが、藤野は、かえって正直な人だと思って、想いが募った。こうして二人は結婚することになった。これについては、「半玉を娶るのはけしからん」、と勤務先で問題にもなったという話だ<sup>7)</sup>。以上は、巖九郎の甥・藤野恒三郎（阪大名誉教授・当時）も認めていることなので、信憑性は高いと言えよう。

前稿で述べたように、藤野巖九郎は1917（大正6）年、東北帝大を退職し、東京神田の三井慈善病院耳鼻科<sup>8)</sup>での研修をおえて、福井に帰郷したが、その年の末に不幸にも、りか夫人は結核で亡くなった。享年33歳。その後縁あって、福井県三国町の有名な回船問屋の番頭、井田多三郎の長女・文<sup>あや</sup>（明治27年生れ）と再婚した。文も先の夫を病気で失っており、藤野よりも20歳も歳が若かった。

藤野は謹厳実直で、取っ付きにくいところがあった。患者をきつく叱りつけることもまれではなかった。患者がお礼に持ってきたおはぎなどは、すべて捨ててしまったという。農家の当時の不潔な衛生状態をよく知っていた彼には、とても口にはできなかつたのだろう。開業当時は耳鼻科だからといって、腹痛の患者をついに診なかつたことは前稿で述べた。これでは臨床医として失格である。だが、のちには努めて自分で診察し、また他の医師が診た方がいいと判断すれば、すぐにその

藤野 巖 九 郎 家 系 図



坪田忠兵衛 (1981) 『郷土の藤野巖九郎先生』、8 ページから引用

医師に紹介する労をいとわなかった。彼はよくも悪くも man of principle であった。

反面、優しく愛すべきところもあった。二度目の夫人・文が二人の子供を身ごもったときの、巖九郎の喜びようはなかった。夫婦は、恒弥と龍弥の二人の男の子にめぐまれた。彼は子供らの教育に熱心に取りくんだ。子供たちが小学校に上がると、早くも外国語を教え、孝経などの漢書を素読させた。巖九郎が自身で描いた絵入りの英語やフランス語のテキストが記念館に展示されている。相当な「教育パパ」だった。やむなく閉ざされた教育への彼の情熱が、このような形になって表れているのだろう。

すでに述べたことと重複するが、一そこには筆者の誤記も若干含まれていたもので、一訂正をかねて、さらに記しておきたい。岩波書店は同文庫の一冊に魯迅の選集を加えることをきめた。収録作品の選定は、訳者の一人である増田渉に任されたが、「藤野先生」だけは入れるようにと魯迅はいった。文庫は『魯迅選集』佐藤春夫・増田渉訳として 1935 年 6 月に出版された。「藤野先生」の最初の邦訳である。

その後、魯迅の健康がよくないことを知った増田は、1936 年の夏、見舞のため久しぶりに上海を訪れた。その時、魯迅は、訳が出たのにまだ何の反応がないという話を聞いて、「先生はもう亡

くなっただらいいね」と言い、「藤野先生の家族の人もいないのだろうか」と訊ねたという。増田は、このときはじめて「藤野先生」を文庫に入れて欲しいと魯迅が言ったのは、もしかしたら先生の消息が分かるかもしれない、と期待したからだと知った。〔増田渉（1970）；224-225〕

この岩波文庫を読んだ福井中学教諭の菅好春（同校で長男の恒弥を教えた国語の先生。恒弥は前年、卒業し、第四高校に進学。）は、そのことを恒弥に伝えた。こうして藤野巖九郎はかつての教え子周樹人が文豪魯迅になっていたことを知り、大変喜んだという。しかし菅は病気でまもなく亡くなったので、この間の事情は魯迅に伝わらなかった。翌年10月、魯迅の病状は急に悪化し、彼は恩師が郷里で健在であることを知らずに、同19日にこの世を去った。

日中戦争がはじまったころ、藤野は子息の恩師で碁敵でもあった竹内静に「中国は日本に文化を教えてくれた先生だ。こんな戦争は早くやめなければならない」といったと言う。〔泉彪之助（1988）；34〕

彼が晩年借りていた医院は、玄関とその脇にある二畳の待合室、その奥の診察室は八畳というごく簡素なもの。ここに自宅から京福電鉄に乗り、毎朝30分ほどかけて通勤していた。県道から素どおしのガラス戸越しに待合室がよく見えた。患者もまばらで、冬など待合室の火鉢に暖を取りながら新聞をよむ巖九郎の姿をよく見かけた。

だから人は「率直に言って、晩年の先生は、不遇であった」という。不遇にはちがいないのだが、遠縁にあたる藤野恒男は、この点について以下のように補足している。長男・恒弥は1938年東北帝大医学部に進学し、ついで2年後次男・龍弥が海軍兵学校に入学。これは、2人とも医師にしたいと希望していた当初の藤野の意に半ば反するが、蓄えのない彼には、二人の学費を捻出することは容易ではなく、次男が官費養成の兵学校に行くのを認めざるをえなかったという。恒弥は大学を卒業し、医師になるとすぐに招集された。陸軍軍医として南方方面（ラバウル）にかりだされ、不幸にも病をえた。将校の場合、軍刀などを自費で用意しなければならいが、巖九郎はそのための費用がなく、知人から借金して捻出した。他方、戦時下で、彼の保管している薬品を、かなり高値でぜひ売って欲しいという申し出があったが、「薬は患者のためのものだ」と言って彼は首をタテに振らなかったという。

「…巖九郎は経済上の問題で余り動揺を見せる人ではなかった。…真に巖九郎を不遇と感じさせることは長男恒弥の急逝であろう。20年1月、恒弥は広島陸軍病院で戦病死。その後巖九郎自身が死去するまでの最晩年はやはり不遇という他はない。」〔藤野恒男；1993〕それ以来、ポカンとした放心状態の彼を見かけた人は少なくない。

さらに約7か月後の8月10日、福井が34.1度という猛暑を記録した日の夕刻、巖九郎は診療所から友人宅へ向かう途中急に体調をくずし、翌11日に亡くなった。享年71歳であった。敗戦の日の5日前のことであった。

#### 暫定的な結語<sup>9)</sup>

これまで述べてきたことをまとめながら、以下に、暫定的な結語を述べることにしたい。

魯迅は、中国の因習、奴隷根性、没法子（諦めの姿勢）、馬々虎々（いい加減な態度）、その対

極にある支配者の途方もない専制主義——これらを根本的に批判し、表現した作家、文学者であり、思想家であった〔片山智行（1996）〕。批判の筆法は鋭く、徹底しており、ときにはそこまで言わなくてもいいのではないかと私には思われることがある。たとえば彼は「おぼれた犬も打て」と言って、林語堂を批判する。魯迅は、反対者を中途半端に許したら、本人が許した反対者によって殺されたという例をあげ、「フェアプレイ（は）急ぐべからず」〔魯迅全集、第1巻; 342～54〕と反論した。内戦の時代は、「弱肉強食」の時代であることを知れば、彼の主張も理解できる。別の言い方をすると、中国四千年の歴史は、それほど重く、その変革は気の遠くなるような時間と根拠とを要する困難なものであった。たんなるキレイ事で済ますことはできないのである。

だからと言って彼の批判は、たんに辛辣で、冷徹で、相手をやり込めるだけのものだったのか。彼は祖国を憎み、痛烈に批判し、庶民を軽蔑し、論敵をやり込め、自らを高みに置くことで満足しようとしたのだろうか？魯迅は、伝統社会の矛盾をするどく別抉しながらも、彼が創造した阿Qや孔乙己のような人物を、どこかひょうきんで、愛すべき人物として、ときにコミカルに、あるいはペーソスをこめながら描いている。そして根底においては、彼らの解放を示唆し、暗示し、望んでいる。疑いもなく彼は祖国を心底愛しているのだ。ただそれが容易ならざることを認識しているがゆえに、ときに寂寞とならざるをえないのである。

また、だからこそ祖国の主権、人々の生命、財産、誇りなどを蹂躪する諸外国（むろん日本も含む）による支配や侵略を許すことはできなかった。誤解を恐れずにいえば、彼はこのような意味において民族主義者であった。彼の葬儀に加わった民衆は、「民族魂」と大きく書いた布で、彼の棺をおおったという。この事実は、彼が彼らから民族主義者と見なされていたことを象徴している。国民国家の形成・独立には、民族主義が重要な役割をはたす。なぜなら民族独立戦争のために必要な熱意、統一した意思とエネルギーは、もっぱらそれによって供給されたことは、歴史が教えるところだから。

だが、魯迅の民族主義は、決して狭隘で、閉ざされたものではない。彼は青年時代から海外諸国の文化・芸術や科学・学問に接し、そこから学ぼうという姿勢をつねに取ってきた。このような態度は、狭い、閉鎖された民族主義のもつ硬直性、独善性あるいは狂信性を相対化することを可能にする。そればかりではない。己を謙虚にし、国際連帯への道を拓くだろう。そこが毛沢東と彼とが根本的にちがうところである<sup>10)</sup>。魯迅をたんなる民族主義者と同列にしてしまうことは誤りである。

魯迅はロシアの盲目詩人エロシェンコを北京大学のエスペラント語の講師として招き、自宅に住まわせた。彼自身エスペラント語を学習し、エスペラント学校の講師も務めている（1923～25年、断続的に）。死の直前、あるアンケートに応じて、次のように答えている。「私はエスペラント語に賛成です。なぜならそれは世界の人々、とくに抑圧されている人々を結びつけることができるからです。エスペラントという媒介を通して世界の様々な地域の文学は、お互いに知り合うことができます」と。〔Weiss, (1985); 82-83〕明らかに魯迅は、国際主義者である。あえて言えば、彼は開かれた民族主義者であり、同時に愛国的な国際主義者でもあった。これはほんの一例にすぎぬが、魯迅はそもそも一筋縄では捉えられない存在なのである。

魯迅と藤野巖九郎 —この二人のある意味で頑固な者に共通するものがあるとすれば、何であろうか。しいて言えば、《誠実さ》であり、そして《自分の原則を持っている人》“man of principle” —ではなかろうか。さらにそこから発する若者のための教育に対する熱意、「青年の磁石」であったことが指摘できるだろう。来日してまもない魯迅が友人たちと故国の国民性についてよく議論した。日本にあって故国にないものは何か。それになぞらえて言えば、一方における《誠実さ》であり、その対極に《馬馬虎虎》、《没法子》がある。魯迅は、短期間だが藤野の講義と指導を受けて、そこに誠実さを見出し、感動したのではないか。それは、故国の近代化の前提として不可欠なものである。魯迅は、日本が中国を侵略している時でさえ、日本人の美德、《真面目さ》についてはなお学ばなければならない、と内山完造に言ったという。〔内山完造（1979）；89〕

他方、藤野巖九郎も、自分の原則に忠実であった。患者を叱るのは、彼らの病気を早く治したいがためだろう。それは逆説的だが彼なりの優しさの表現と言えないこともない。職業倫理に誠実なるがためのことであろう。魯迅がかつての教え子であることを知り、藤野は大変喜んだ。が、自分はとくに彼だけを特別に扱ったわけではない。教師として当然のことをしたまでのことだ——と淡々と述べている。彼は榮譽も高い報酬も立派な診療所とも無縁だった。もし魯迅が「藤野先生」を書かなかったとしても、彼の生活は基本的には少しも変わることはなく、彼は一介の田舎の医者として、村民たちからは敬愛と畏敬の念をいだかれながら、ひっそりと過ごしたであろう。事実、そのように暮らしたのであった。

## 《注》

- 1) 〔藤井省三（2002）；18〕
- 2) このような観点からすると、『域外小説集』で取り上げられた国が、英米（1篇）、フランス（2人、6編）のようにヨーロッパ文学の中心国ではなく、むしろロシア（5人、18篇）、ポーランド（1人、4篇）、バルカン諸国などの後進周辺国ないし被圧迫国であることが容易に理解されよう。魯迅はロシアのアンドレーフの作品を好んだ。つまり彼らの関心は、まさに近代化にともない社会が激変し、それがいかなる問題をもたらすのか、——そのような矛盾に直面し、またはこれから直面しなければならないであろう東欧などの周辺国に集中していたのである。〔同上〕
- 3) 魯迅の教育活動については、〔山本正雄（2006）〕を参照せよ。魯迅の講義は、学生の間で人気があった。彼は「青年の磁石」（許広平）といわれたように、若者の心を引きつける磁力をもっていた。
- 4) この要求は、当初、秘密にされていた。袁世凱がそれを合衆国にもらしたのは、西欧列強が日本に圧力をかけ、日本が「要求」を取り下げると暗に期待したからに他ならない。中国国民が「要求」を知ったのは、ヴェルサイユ条約交渉のときだった。同条約は、中国の主張をまったく認めなかったため、中国はその批准を拒否した。
- 5) 武者小路実篤の「新しき村」運動について、周作人は早速、紹介の報告を書き、『新青年』誌に発表した。さらに自ら宮崎県の同村を訪問。各種の雑誌に報告を書き、自宅に「新しき村北京支部」を置くほどの熱心さであった。

興味深いのは、蔡元培、陳独秀、周作人、李大釗などの有名知識人が連名で「工読互助団（青少年に読書を奨励するための会）設立購読基金設立のための募金を呼びかけていることである（『新青年』7-2、1920年1月）

これは「新しき村」をモデルにしたもの。この団体の幹部には、李大釗、毛沢東など、のちの社会・政治運動のリーダーたちがいた。とくに毛沢東は、わざわざ周の自宅を訪れたほどのつよい関心を示したという。〔劉岸偉 (2011; 148~9)〕これは、ボルシェビズム導入以前の牧歌的状况を示すとともに、人々が当時いかに理想社会をつよく希求していたかを物語るものである。

ちなみに、1923年、突然周兄弟は不和となり、魯迅は別に家を求めて、別居。生涯ついに二人は和解することとはなかった。作人は日中戦争中も北京に留まり、戦後には対日協力のゆえに国民党政権の下で有罪判決をうけた。その後、毛沢東の文革時代には、紅衛兵の厳しい追及をうけ、不遇のうちに亡くなった(1967年没)。

- 6) 魯迅は小林多喜二の拷問・虐殺に対し、個人名で弔文をおくった(1933年)。本人直筆か代筆か問題が若干あるようである。〔魯迅全集、第十卷; 437-8〕
- 7) 藤野巖九郎の略歴に、明治33年9月28日に愛知医学校の教諭の「休職を命じられる」とあり、翌年、同校を退職している。たとえば〔坪田忠兵衛 (1981); 48〕。退職までの間、明治生命の社医となり、その後東京帝大解剖学教室で研究を続けている。この休職処分の理由であるが、りかとの結婚問題と推測される。〔土田誠 (2013); 46〕 次ぎの指摘がある。「…同僚や世間は、半玉(芸妓見習い)と結婚するのは官吏として軽率だと批判。…医専の職員会でも問題となり、一時彼は休職に追い込まれた」と。ただ、土田氏は、この本の「後書き」で、一部「フィクションも入れた」と断っているの、事実か否か、確認できない。筆者の電話による質問に対し、土田氏は「当時、藤野の故郷で広く広まっていた伝聞によった」と答えた。しかし当時の社会状況からすると、この種の「処分」はありうると考えられる。
- 8) なぜ彼は耳鼻咽喉科を選んだのか。解剖学で習得した技能が、外科的処置の多い耳鼻科でより生かせるのではないかと判断したためと推察される。〔仙台における魯迅の記録を調べる会 (1978); 353〕
- 9) 小論では、スペースの関係上、上海期の魯迅の活動、彼の文学理論をめぐる検討が十分になされていない。さらに、中国で根強く反復され、定着してきた統治形態をたんに専制的独裁者の個人的資質や性格のみに帰すことで済まされるのだろうか? 筆者の念頭には、かのK.A. ヴィットフォォーゲルの提起した *orientalische Gesellschaft od. Dispotismus* の研究がある。これらは残された課題である。ここで「暫定的」結語と述べた所以である。
- 10) 毛沢東は、なぜ海外留学しないのかという質問にこう答えている。「東洋文明とは、世界文明の半分のことだ。しかも東洋文明とは中国文明のことだといえる。中国にいれば、翻訳が手に入るし、こちらを読む方が原本を読むよりはるかに速い」と。〔ジョナサン・スペンス (2002); 50〕 彼の場合、必要なのは、主に情報であり、明らかに文化ではない。

## 補論 1. 魯迅の死因について

魯迅の死が突然だったため、彼の死因をめぐる若干の議論があった。見逃しえないのは、日本人医師による殺害説である。この点は医学的に泉彪之助氏によってすでに詳細に検討され、殺害説は明快に否定されている。だが、殺害説は未だにくすぶっているようだ。とくに気になるのは、魯迅の子息・周海嬰が死因について殺害説を示唆していることである。〔周海嬰 (2003)〕 日本軍の中国人に対する蛮行がひどかったことは否定できない。たとえば〔許広平 (1955)〕 参照。しかし、だからといって、それと死因の究明とを混同することは誤りであろう。それゆえ泉氏の研究に依拠して、死因をめぐる問題をここでやや詳しく紹介しておこう。

魯迅は過労と肺結核の進行のため、晩年には健康を害していた。掛かりつけの医師は須藤五百三いおぞうといい、第三高校医学部(現岡山大学医学部の前身)を卒業し、陸軍軍医勤務のち上海で開業。やや高齢であったが、臨床経験は豊

富な医師であった（軍医という経歴が遺族に疑念を抱かせたのは無理からぬことだが）。アグネス・スモドレーはじめ魯迅の友人たちは、回復がはかばかしくないのもっと信頼できる医者に診てもらおうことを強く勧めた。それ以前から佐藤春夫や増田渉、須藤医師自身からも、またゴリーキーからも、日本やソ連など国外で保養するように勧めがあった。魯迅は外国での治療には応じず、ただ在上海のアメリカ人医師で呼吸器の専門医、トーマス・ダンの診察だけを受けた。ダン は病状がひどいので「西洋人だったら五年前にとっくに死んでいただろう」という厳しい診断を伝えた。魯迅はその後、念のためレントゲンを撮ったが、結果はダンの言うとおりで、病状が相当悪いことを知った。

一方、須藤医院は繁盛しており、須藤は患者たちに信頼されていた。診察のときの記録によると、須藤は魯迅を診ながらこう述べたと言う。「あなたの肺は大分よくなりました。まだ十年は生きられますよ。そうすれば坊やも大きくなって、奥様も心配が要らなくなりましょう。」魯迅はこれを聞いて大変喜んで、許夫人に訳して聞かせたという。泉氏は、魯迅がダンのような直截な診断を聴いて、落ち込むような精神の持ち主ではないが、子どもや夫人の将来を思うと、須藤のような診断を信じようとしたのではないかと推測している。これは納得のいく推測だと思う。

直接の死因は、長年侵されていた肺結核ではなく（それもあったが）、嚢胞の破裂による気胸であった。須藤も気胸についてすでに記していた。〔朝日新聞（1969）〕、〔泉彪之助（1982、1985a、1985b、1987）〕。中国の公的機関も「嚢胞破裂による気胸」としている。「謀殺説」は全く根拠を欠くものである。

## 補論 2. 陳独秀のその後

陳独秀は、国共合作の失敗を彼個人の日和見主義によるものとされ（実際にはコミンテルンの方針に従ったにすぎない）、1927年8月共産党中央委員会から追放された（新総書記には瞿秋白くしゅうはくが選出）。コミンテルンが「ソ連防衛を各国共産党の義務」とする方針を打ち出すと、陳はこれに反対の立場をとった。さらに彼は、モスクワ帰りのトロツキスト・グループと接触し、自らの政治認識がトロツキーの考えと近いことを知る。以後、トロツキー理論を吸収するだけでなく、分派を結成し、独自の政治活動を開始した。こうして陳独秀は、1929年11月、トロツキストとして党籍を剥奪され、中国共産党から追放された。

さらに不運にも、彼は上海で国民党政府によって逮捕され（1932年10月）、裁判にかけられた。アインシュタインなど世界各国の著名人から助命の嘆願が多数届いたという。当初13年の刑、最高法院で8年に減刑。その後第2次国共合作により政治犯が釈放されることになり、結局、5年あまりを南京の獄中で過ごした。釈放は日中戦争が開始（蘆溝橋事件、1937年7月）された翌8月のことであった。

釈放後、陳は自ら分派活動を停止し、意外にも共産党への復帰を希望するが、党内のスターリン派、コミンテルンの猛烈な反対によって、復党は実現しなかった。胡適やトロツキーからは国外で生活するよう誘われたが、彼はいずれも断った。出獄後、重慶郊外の江津に転居。1942年5月27日、鬼才陳独秀は、持病の胃潰瘍、心臓病の悪化のため波乱に富んだ一生を終えた。享年62歳であった。〔横山宏章（1983）〕

## 《参考文献》

朝日新聞（1959）「魯迅の死因：楊藍・上海魯迅記念館副館長に聞く」、6月14日

泉彪之助（1982）「魯迅の胸部X線写真」、『日本医事新法』、3034号

同（1984）「藤野巖九郎の学歴とその時代的背景」、『日本医学史雑誌』、30巻4号、10月

同（1985a）「魯迅の診察」、『魯迅全集・月報』第6号

- 同 (1985 b) 「須藤五百三 —魯迅最後の主治医—」、『福井県立短期大学研究紀要』、第 10 号
- 同 (1987) 「トーマス・B・ダン —魯迅を診察したアメリカ人医師—」、『福井県立短期大学研究紀要』、第 12 号
- 同 (1988) 「藤野巖九郎の生涯」、『日本医学新報』、第 3357 号
- 同 (1991) 「魯迅の医師たち」、『月刊 しにか』(SINICA)、2-9
- 同 (1993) 「魯迅と藤野巖九郎」、福井県蘆原町教育委員会
- 内山完造 (1979) 『魯迅の思い出』、社会思想社
- 小田嶽夫 ([1941]、1949 『魯迅の生涯』、鎌倉文庫
- 片山智行 (1996) 『魯迅 阿 Q 中国の革命』、中公新書
- 顧偉良 (2004) 「遊歩者としての経験——弁髪・にせ毛唐・見世物——」、『国文学 言語と文藝』121 号所収
- 許広平 (1955) 『暗い夜の記録』、安藤彦太郎訳、岩波新書
- 同 (1968) 『魯迅回想録』、松井博光訳、筑摩書房
- 周海嬰 (2003) 『わが父 魯迅』、岸田登美子・瀬川千秋・樋口裕子訳、集英社
- ジョナサン・スペンス著、小泉朝子訳 (2002) 『毛沢東』、岩波書店
- 関川夏央 (2003) 『白樺たちの大正』、文芸春秋社
- 仙台における魯迅の記録を調べる会 (1978) 『仙台における魯迅の記録』、平凡社
- 竹内実 (1984) 「魯迅の死因 疑念表明のそこにあるもの」、朝日新聞、6月14日、夕刊
- 土田誠 (2013) 『医師 藤野巖九郎』、あわら市日中友好協会
- 坪田忠兵衛 (1981) 『郷土の藤野巖九郎先生』、藤野巖九郎先生顕彰会
- 中野重治 (1997) 「魯迅」、『中野重治全集』、第 20 卷所収、筑摩書房
- 藤井省三 (2002) 『魯迅事典』、三省堂
- 藤野先生と魯迅刊行委員会編 (2007) 『藤野先生と魯迅—惜別百年—』、東北大学出版会
- 藤野恒男 (1993) 「藤野巖九郎小伝」、『仁愛女子短期大学研究紀要』第 26 号
- 藤野恒三郎 (1970) 『学悦の人』、大阪大学微生物病研究所・藤野博士退官記念会
- 藤野恒道 (1956) 「藤野先生小伝」、『中国文学報』、四冊、京都大学文学部中国語中国文学研究室
- 増田 渉 (1970) 『魯迅の印象』、角川書店
- 同 編 (1972) 『五・四文学革命集 —中国の革命と文学 2』、平凡社
- 山本正雄 (2006) 『藤野先生と魯迅の思想と生涯—福井発の「師弟愛」を日中友好の絆に』、橋本確文堂/勝木書店
- M. メイスナー著、丸山松幸訳 (1971) 『中国マルクス主義の源流—李大釗の思想と生涯』、平凡社
- 横山宏章 (1983) 『陳独秀』、朝日新聞社
- 劉岸偉 (2011) 『周作人伝 ある知日派文人の精神史』、ミネルヴァ書房
- 魯 迅 (1953) 『魯迅作品集』、竹内好訳、筑摩書房
- 魯 迅 (1956) 『魯迅選集』、第 12 卷、岩波書店
- 魯 迅 (1984~86) 『魯迅全集』、全 20 卷、学習研究社
- Weiss, Ruth F (1985) *Lu Xun A Chinese Writer for All Times*. New World Press. Beijing
- Gray, Jack, (1990), *Rebellions and Revolutions: China from the 1800s to the 1980s*. Oxford University Press.

\*本稿の執筆にさいし東北大学附属図書館参考調査係の須田さん及び福井県立大学附属図書館・副館長の三嶋義之氏に大変お世話になった。記して謝意を表したい。

## Lu Xun and Prof. Fujino

— An Aspect of Japanese and Chinese Relations —

TOKUNAGA Shigeyoshi

The prominent Chinese writer, *Lu Xun* (鲁迅 : 1881~1936) studied in Japan for seven and half years at the beginning of 20th century. In this paper the author describes Lu Xun's activities after his left Sendai. He also refers to Prof. Fujino, Lu's former teacher's late years as a medical practitioner in Fukui.

Nearly twenty years later Lu wrote a short story titled "*Prof. Fujino*", in which he admired Fujino was as one of his most highly respected persons.

In Tokyo, Lu with his younger brother, Zhou Zuo-ren (周作人) a writer as well, planned two ambitious projects, but they failed to achieve them mainly due to lack of capital. Lu Xun had to return to China in 1909.

After teaching at some high schools, Lu became a civil servant of the Ministry of Education in Beijin. Meanwhile under the strong leadership of president Cai Yuanpei, Beijin University was radically reformed from 1916. Cai invited as professors young and talented persons such as Chen Duxiu (陳独秀), Zhou Zuo-ren, and Dr. Hu Shi (胡適). Lu Xun also delivered lectures at the University as a part-time lecturer.

Meanwhile, Chen Duxiu published his journal "*New Youth*." Its motto was 'science and democracy'. This journal became rapidly popular among the youth of the time. *The literature revolution* proceeded parallel with *the May 4th movement*. These young professors advocated and promoted a *culture and literature revolution*. This movement developed parallel to *the May 4th movement*. They attacked forcibly traditional custom and above all Confucianism. They contributed their critical articles to the *New Youth*. Lu Xun supported this new movement, and wrote his first novel *A Madman's Diary* for it. The novel was written in the colloquial style, corresponding to *the culture revolution*. In 1921 he published "*The True Story of Ah Q*", which was estimated as one of the most outstanding novels in modern China.

Although Lu Xun criticized the old traditional system radically, the author maintained that he was basically nationalist, but not in a narrow and common meaning. Again, he was open-minded and always kept a positive attitude towards learning and introducing foreign cultures. In this sense he was a true internationalist. In fact, he was advocated

Esperanto and also translated energetically many foreign works into Chinese.

Although Fujino was obstinate, he was respected and beloved by his neighbors. Fujino and Lu Xun had *sincerity* in common and they were both *men of principle*. They were eager and sincere in educating young people.